

金 周 賢

- 第 18 章「中日戦争の炎のなかで」より -

キムイルソン

金周賢（キムジュヒョン）は抗日遊撃隊のもっとも代表的な給養担当幹部として、朝鮮人民のあいだに広く知られている。しかし、彼は給養関係の活動でのみ腕をふるったのではない。彼は優れた軍事指揮官であり、有能な政治工作員でもあった。遊撃隊に入隊する前までは、地下組織活動にも多く関与していた。

わたしが金周賢を知ったのは、抗日遊撃隊を組織する前のことである。1931年、わたしが興隆村で武装闘争の準備を進めていたころ、金周賢は大沙河の高登廠という村で、農民協会と反日同盟組織の責任者として地下活動にたずさわっていた。彼をわたしにはじめて紹介したのは、小沙河区党組織責任者の金正竜（キムジョンヨン）である。対面して話し合ってみると、たいへん謙虚で率直な人だった。

ある日、金周賢が独立軍出身者を反日同盟から全員除名しようとしていることを金正竜から聞かされ、わたしは彼を訪ねていった。偏狭な人たちから独立軍の悪口ばかり聞かされていた彼は、独立軍出身者を闘争対象とみていた。わたしは、革命における統一戦線の意義を述べ、反日愛国思想をもつ独立軍出身者にたいする偏見を正すよう長時間、説いた。翌日、金周賢は除名対象にしていた独立軍出身の有志たちを訪ねまわって謝罪した。有志たちは、金周賢をわきまえのある人だとほめそやした。

そんなことがあってから、金周賢は活動の過程で困難な問題にぶつかると、よくわたしに相談に来た。わたしもときどき彼の家を訪ねた。8歳もの年齢の開きにもかかわらず、われわれは気のおけない友となった。1931年といえば、まだわたしは抗日遊撃隊の隊長ではなかったが、彼はわたしの意見をいつも素直に受け入れた。わたしは彼の謙虚な人柄に魅せられた。彼もわたしにたいへん好意を寄せた。彼はわたしの言うことなすことを文句なしに支持した。

ところで、彼の一家は金周賢を手におえない強情っぱりだとみなしていた。彼が結婚し家庭をもつまでのいきさつを聞くと、なるほどとうなずけないでもなかった。

金周賢一家の故郷は咸鏡（ハムギョン）北道の明川（ミョンチョン）だったが、暮らしに困り中国東北地方の和竜に移住したという。彼は、幼年時代を過ごした故郷をいつも懐かしがっていた。書道（漢文を教える私塾）での課程を終えると国内の漁大津（オデジン）に移り、漁業労働をしながら成長した。彼の兄は、妻帯すべき年頃になっても帰ろうとしない弟を強引に大沙河へ連れ戻し、あらかじめ目星をつけていた隣村の娘との縁談を強引にまとめた。本人の意向にかまわず親たちが勝手にまとめた婚約だったので、金周賢は相手の顔も知らなかった。彼は親同士が婚約をまとめたことなどは意に介さず、沿海州帰りだという邱山学校の教師の家に入りびたり、ロシア革命の話に夢中になった。彼の家では婚礼の支度におおわらわだったが、彼は父親に、見も知らぬ娘と一緒にいる気など毛頭ないと言い放った。父親は、息子が照れ隠しにそんなことを言ったのだらうと思い、笑ってとりあおうとしなかった。ところが式を数日後に控えて、新郎たるべき彼が突然、行方知れずになってしまったのである。親たちは大変なことになったと青くなり、娘の家の方でも大騒ぎになった。金周賢の兄は弟を探し出すために、家事をなげうって、冬中、間島各地を探し歩き、やっと邱山学校の教師から、弟がロシアへ行ったということ聞き出した。彼は苦勞の末にロシアまで行って弟を連れ戻した。金周賢は結婚を拒むわけにはい

かなくなった。彼が帰るとすぐ、結婚式は大急ぎでとりおこなわれた。金周賢は妻をめぐってからも野良仕事はそっちのけでいつも出歩いた。考えあぐねた父親は、彼に家を一軒建ててやった。かまどを分ければ妻子を養うためにも家庭に落ち着き、農事に打ち込むだろうと早合点したのである。しかし、そうした処置はかえって彼の革命熱に油を注ぐ結果になった。別に家をもつと、もう両親の統制を受けずにすむので、わが家を本拠にして組織の結成や大衆啓蒙など思いのままに行動した。果ては家の中に地下室を作り、新妻まで革命活動に引き入れた。金周賢の父親は「あいつの強情には勝てん」とすっかりあきらめた。

わたしはこんな話を聞いて、金周賢がなかなか芯のある男だと思った。誰がなんと言おうと、自分の意思と決心によって選択した道をあくまで突き進むその気骨に、わたしはすっかりほれ込んだ。われわれが安図で抗日遊撃隊を組織してまもなく、金周賢はそのような頑強さと進取の気性をもって和竜で遊撃隊を組織し、指揮官となって活躍した。

それ以来、何年か別々に活動していたわれわれが再会し、同じ部隊で活動するようになったのは、馬鞍山で新師団を編制したころからだ。朝鮮人民革命軍の主力部隊が新たに編制されると聞いて、真っ先に馬鞍山にやってきたのが金周賢の小部隊だった。幹部不足に悩まされていたときだけに、彼の出現はオアシスに出合ったようにありがたかった。当時、部隊には給養担当の適任者がおらず、連隊政治委員の金山虎がその仕事を兼任していたので、部隊の編制に際し、わたしは金周賢を司令部付き給養担当官に任命した。彼は部隊の給養活動を強力におし進めた。これといって、せわしく立ち回ったり、配下の隊員を強く督励しているふうでもなかったが、食糧や衣類も難なく手に入れ、部隊の生活を潤いあるものにした。

有能な給養担当官としての金周賢の本領は、部隊が白頭山地区に進出して活動したころ遺憾なく発揮された。彼が一度工作に出かけると、たちまち援護物資をかついだ支援者の列がぞくぞくと密営にやってくるのである。一旦その気になりさえすれば、なんでも必ず手に入れてきた。

抗日武装闘争の全期間を通して、1937年の元日ほどみちたりた正月はそうなかったと思う。それも、白頭山に来て初めての正月だから粗末に過ごすわけにはいかないと金周賢が準備に力を入れたおかげである。普天堡戦闘（ポチョンボ）を控えて整えた600余着の軍服と軍帽、脚絆、弾帯、背のう、テント用の布地、そのうえ人数分の靴、大量の食糧なども彼が担当し呉仲洽と協力して入手したものであった。父親は、妻一人まともに養えないだろうと心配したが、彼は素手のほか何もない白頭山で、数百名の大家族を養う重責を担って労をいとわなかったのである。わたしがその労をねぎらい、給養活動の成果を称えると彼は、西間島の住民が良い人たちだから、すべてがスムーズに運ぶのだと答えたものである。

部隊を養うために唇がひび割れ、充血した眼を休める暇もなく奔走する金周賢の涙ぐましい努力に感動した人民は、知恵をつくして彼を助けた。彼は人民のなかに入るといつも彼らとうちとけ、その労苦を思いやり、やわらげる人民の息子となり、部隊に戻っては、思いやりの深い母親となった。西間島の人たちは彼を「うちの金（キム）担当官」とも呼んでいた。

金周賢は、かたく閉ざされた心の扉も難なく開かせる特殊な手腕と特異な親和力をもっていた。いつも真実を語り、真情をもって人に接し、良心的でつつましく謙虚なその人となり人が人びとの心を引きつけたのである。金周賢が給養活動だけでなく、政治工作でつねにりっぱな成果をあげたのも、それに負うところが大きかったのではなからうか。

金周賢の給養活動で独特なところは、何をすることも政治的な方法で処理したことであつたといえる。たとえば軍服作りの任務が与えられると、彼は配下の隊員たちに司令部の指示をおうむ返しに伝えるの

ではなく、任務の緊急性や遂行方途を懇切丁寧に説明するのである。

そうした政治活動の手腕を高く評価したわたしは、骨の折れる複雑な政治工作課題がもちあがると、よく彼を呼んだものである。白頭山根拠地を築くため先遣隊を送るときも、金周賢を責任者に任命した。先遣隊の任務は単に白頭山密営の候補地を選び、部隊の移動通路を開き、国境地帯の敵情と人民の動向を探るだけでなく、反日地下革命組織の結成に必要な政治勢力を見出し、その準備をさせることにもあった。それだけに政治工作をどうしても並行させなければならなかったのである。

金周賢はその政治工作任務をりっぱに果たした。彼が先遣隊として白頭山地区で積んだ業績は、記録に残して大いに誇れるものだった。小白水谷、熊コム山、獅子（サジャ）峰、仙五山、黒瞎子溝、地陽溪谷、徳水谷をはじめ白頭山地区の密営候補地はすべて、金周賢の先遣隊が見つけたものである。彼は地陽溪、小徳水、新昌洞、官道巨里、宗理院村、坪崗徳、上豊徳、桃泉里、三水谷など西間島の村々をめぐる、党組織建設と統一戦線運動に献身しうる多くの人材を見つけ、革命軍の予備源も少なからず整えた。彼らは、祖国光復会の十大綱領と創立宣言にもられたわれわれの革命路線を国内と西間島の広い地域に伝播するうえでも大きな役割を果たした。金周賢先遣隊がおさめた成果は、抗日武装闘争を一段と飛躍させる一つの跳躍台となった。

困難な課題がもちあがるたびにまず呼ばれる人物、金周賢はわれわれの部隊でそういう存在だったのである。彼は誰からも重んじられ愛される部隊の宝であった。革命任務にたいする強い責任感と高い政治的能力、優れた組織の手腕、老練な活動方法は、すべての指揮官が手本とすべきものだった。一言でいって、金周賢は文武両道の人物であった。

金周賢の業績と活動能力を大いに買っていたわたしは、1937年8月中旬、彼を国内派遣小部隊の責任者に任命した。中日戦争が勃発した直後のことである。先にも触れたように、この戦争が勃発すると、われわれは国内で政治・軍事活動を大々的に進め、敵の背後を猛烈にかく乱し、情勢の要請に即応して抗日革命闘争を一段と高揚させる計画を立てた。この計画を実現するために何よりも重要なことは、政治的、軍事的に鍛えられた有能な隊員を選抜して小部隊を組み、国内の必要な地域に先遣隊として送り込み、われわれの構想を実現する活動を展開させることであった。国内の革命組織はさまざまなルートを通じて、城津ソンジン、吉州、明川（ミョンチョン）、端川など咸鏡（ハムギョン）北道南部と咸鏡南道北部の海岸地帯にそって山中に多くの人が集まり、朝鮮人民革命軍との連携をもとうと苦心していることをわれわれに知らせてきた。小部隊の基本的任務はそれらの愛国青年を見つけ出して遊撃隊を組織し訓練する一方、武装闘争への参加が無理な虚弱者は、適切な講習をおこなって地下革命組織のメンバーに育て上げることであった。それと合わせて、住民のあいだで地下組織と武装隊伍を拡大するための大衆政治活動と人材の発掘も予定されていた。さらにわたしは、小部隊に白頭の山並みと摩天嶺マチョンリョン山脈、赴戦嶺プジョンリョン山脈に武装闘争の拠点となる密営候補地を選定する課題も与えた。

この使命の重要性からして、筋金入りの隊員たちで小部隊を編制した。そこには朴寿万、鄭日権（チョンイルグォン）（甕声拉子のちびっこ）、馬東熙（マドンヒ）、金赫哲（キムヒョクチョル）ら政治工作ですでに顕著な実績を示していたメンバーが加わっていた。老練な指揮官を隊長とし、豊かな闘争経験を積んだ隊員をもって組まれたこの小部隊に、わたしは大きな信頼と期待を寄せ、彼らの意気込みと決意もまた大変なものだった。わたしは彼らが任務をりっぱに果たして帰るものと信じて疑わなかった。

「朗報を待っている」

わたしは小部隊を送り出すとき、金周賢にそれ以外のことは言わなかった。彼はくどくど説明しなくても、わたしの意図を十分に汲みとれる人だった。わたしが一言いえば十を察するのが金周賢の特徴だ

った。それで、彼に任務を与えるときは長い説明をしないことにしていた。実際、金周賢にたいするわたしの信頼はそれほど絶対的だった。

早くて4、5か月、遅くても5、6か月で小部隊がりっぱな成果をあげて帰るだろうというのが、われわれ一同の期待だった。ところが驚いたことに、小部隊は出発後1か月あまりで、出しぬけに部隊に帰ってきたのである。まったく予想外の深刻な事態だった。わたしは金周賢の顔色を見て、国内工作が失敗したことを即座に読み取った。彼の報告はわたしを啞然とさせた。小部隊は愛国青年が集まっているという城津（ソンジョン）地方には行き着けず、甲山で立ち往生したあげく引き揚げてきたのである。

李悌淳の新興村ルートを経て国内に入った小部隊は、朴達の組織の線をたどって恵山方向へ向かう途中、地元の組織から日本の産金業者が本国へ運搬していく金塊を仲坪（チュンピョン）鉱山に保管していると知らされた。この通報を受けた金周賢は、鉱山を襲撃して金塊を奪うことにした。給養担当官という職業的な本性が知らぬ間に彼をつき動かしたのである。実際、金塊がいくつか手に入れば、部隊の給養活動にとって思いがけない儲け物といえた。鉱山を襲った小部隊は、いくらかの金塊を得た。しかし、その代償が大きかった。仲坪鉱山での銃声に動転した敵は、数十名ずつ隊を組んで小部隊を追跡し出したのである。小部隊は鉱山を抜け出し、徳山（トクサン）洞の裏山に登ったが、四面包囲の危機に陥り、進退きわまった。金周賢は通告状を1枚書き、風に乗せて敵に送った。

「まぬけ者どもめ、神出鬼没の革命軍をまだ知らぬのか。われわれは鴨緑（アムノク）江を渡るぞ！」

通告状を読んだ敵は大挙して鴨緑江へ向かった。そのすきに小部隊は敵の包囲を脱することができた。幸い包囲網を抜け出しはしたものの、国内深くへ進出することは不可能だった。咸鏡南北道の山岳地帯と遊撃隊工作員の通路と思われる道々にはすでに敵兵が群がっていたからである。金周賢は、後日再び機会をみて国内に入り、工作任務を果たすことにして、いったん帰隊することにした。普天堡戦闘を機に最高潮に達した朝鮮人民の独立への熱望と青年たちの入隊熱に乗じて国内に抗争武力を組織し、武装闘争の炎を東海岸一帯にまで広げようとしたわれわれの計画は、金周賢小部隊の無益な冒険と由々しい自由行動によって棚上げにせざるを得なくなった。摩天嶺（マチョンリョン）山脈の約束の場所で小部隊を待っていた国内の愛国青年たちは、革命軍の使者に会えなかった満たされぬ思いをいだき、失望して四散した。

小部隊が工作地へ行けずに戻ってきたという知らせは、遊撃隊員たちの心にも暗い影を投じた。あれほど地下工作に長けていた金周賢が工作地まで行けず途中で引き返してきたのをみると、国内の空気はよほど殺伐としているに違いないと語り合い、みな沈うつな表情になった。ややもすれば武装闘争の国内への拡大は当分不可能ではなかろうかという悲観的な考えが生じかねなかった。金周賢の失策はこのように収拾しがたいものだった。

わたしは金周賢の失策がどうしても信じられなかった。いくつかの金塊のために小部隊の活動を破綻させたその過ちは、われわれの構想を実現するうえで取り返しのつかない重大な結果を招いた。彼の勝手な行動によって、人民革命軍の敵背攪乱作戦と国内進攻作戦には大きな空白が生じたのである。わたしは今も、彼がああとき東海岸方面にまっすぐに進出して愛国青年たちに会っていたとしたら、われわれの武装闘争史はいま少し豊富になっていたのではなかろうかと、残念な思いにかられるときがある。それほど当時のわたしの失望と挫折感は大きかった。わたしの憤りも度を越すほどのものだった。けれども不思議なのは、激しく昂ぶる感情の渦に巻き込まれながらも、頭をたれて処分を待つ金周賢に一言の追及も叱責もできなかったことである。怒りや失望が極限に達すると、声も出なくなるものらしい。わたしは何も言えず、じっと彼の顔を見つめるだけだった。

司令部党委員会は会議を開いて金周賢の問題を取り上げた。同志たちは口々に、彼の犯した過ちの重

大きさを辛らつに論難した。激昂のあまり、拳で床を激しく叩く者もいた。おそらく金周賢は生まれて初めてそんな批判を受けたに違いない。彼は観念したかのように、肩を落として座っていた。

その日の会議で多くの同志たちが正しく分析したように、金周賢が極端な行動をあえてした根本的原因は、彼が小才におぼれ、高慢になり、問題を近視眼的に見たことにあった。彼は小部隊の任務を戦略的な高みから捉えていなかった。だから金塊という言葉聞いて、つい理性を失ってしまったのである。彼は鉱山を襲う際、後難については考えなかった。彼が告白した通り、これもあれもと欲を出したのである。つまり鉱山を襲って金塊を手に入れ、青年たちにとって武装部隊も組織しようと欲張ったのである。

もちろん、その告白は正直なものだったと思う。そこにはいささかの偽りもなかった。わたしは金周賢がどれほど正直で潔白な人間であるかをよく知っていた。しかし意図はどうか、小部隊が工作地へ行けずに引き返してきたのだから、彼らの行為にみんなが憤激するのは当然だった。わたしは彼を許したかったが、それを口にするにはできなかった。司令官が親しい隊員とそうでない隊員を差別するとか、原則に背くようなことは許されなかった。情にほだされて目をつぶれば、それはどうみても百害あって一利なしというものであろう。わたしが彼のためにしてやれる最大の援助は、過ちを是正する機会を与えることだった。

司令部党委員会は、金周賢を給養担当官の職責から解任することを決定した。わたしもちろん、それに賛成した。だが処罰を受け、うなだれて司令部を去る金周賢の後ろ姿を見ながら、彼が過ちを犯さないよう事前に十分なアドバイスができなかった自分自身をひそかに責めた。小部隊を派遣するとき、周りでどんなことが起こっても、それにかまわず国内の同志が待っているところへ直行するよう一言でも注意していたなら、こんな事態にはならなかったであろう。正直な話、給養担当官であれば金塊といったようなものに心を奪われ、活動コースを変えかねないという異常な状況までは予想できなかったのである。

金周賢は解任後、思想鍛錬をりっぱにおこなった。今日ではそのような思想鍛錬を革命化といっている。炊事隊員になった彼は、配属されたその日から釜を背負って歩いた。きのうまで部下であった隊員に混じって釜を背負って歩くというのは、口で言うほどやさしいことではない。そういう境遇に立たされれば、他へ移してくれと願い出るのが普通である。しかし金周賢は炊事隊員として働くことを少しもいとわず、恥ずかしがりもしなかった。むしろ、側の隊員たちが気兼ねするほど黙々と熱心に働いた。表情も明るく、いつも快活に振る舞っていた。

ある日、わたしは金周賢の生活ぶりが気になって第八連隊の食堂へ行った。金周賢は額に汗をにじませながら、隊員たちの給仕をしていた。そのとき一人の隊員が自分の汁をまたたく間にたいらげ、さじで食器を叩きながら声高に金周賢を呼んだ。

「おい、炊事隊、汁のお代わりだ」

やんわりとお代わりを求める普通の声ではなく、明らかに人を小ばかにした口調だった。だが、金周賢は顔色一つ変えず、「はい、ただいま」と答えると、しゃもじで汁を汲み急いでその隊員のところへ行った。

その夜、わたしは金周賢にぞんざいなものの言い方をした隊員を呼び、過ちを犯して降格された者だからといって呼び捨てにしたり、見下してはならないと言いつけさせた。過ちを犯した人であるほど、よそよそしくしたり、猜疑の目を向けたり、さげすんだりすべきではなく、いっそうあたたかく接し、心から力になってやるべきだと諭した。隊員は自分の態度を反省した。

地位というものは固定不変ではない。それは下がることもあれば上がることもあるものなのだから、

真の同志的関係を保つためには、地位ではなく人間を見るべきである。隣人が苦境に陥ったときは、普段よりももっと親身になって助けるべきである。抗日革命闘士たちは、戦友が過ちを犯し職責を解かれても、冷たく扱ったり排斥したりするようなことなく、過ちをきれいにそそぐよういろいろと援助したものである。

金周賢が炊事隊員になって1週間ほどしたある日の行軍中、わたしは彼のそばによって、背のうをよこすようにと言った。銃と背のうの他に釜までかつぎ、重い足どりで歩く姿が何となく気の毒に思えたのである。しかし彼は重くないと言って断った。わたしが背のうの肩ひもに手をかけると彼はかたくなにわたしの手を押しつけて隊列の後にしたがった。そんな姿を見ると、何となくわびしい気持ちになった。もしや党会議で解職処分を受けたことを不満に思っているのではないかとさえ思った。なにげなくその顔を見ると涙が頬を伝っていた。わたしの胸は押しつぶされるように重苦しくなった。あの剛毅な男がなぜ涙を流すのだろう。

金周賢は個人的に見れば大きな悲しみと不幸を背負っていた。妻は地方工作中に敵の「討伐」にあつて殺害され、娘も病死していた。ただ一人残った息子は、彼が遊撃隊に入隊するとき他人にやってしまった。それ以来、彼はひたすら革命一筋に生きてきたのである。

その夜、隊員たちが寝静まった後、わたしは金周賢に会うつもりで第八連隊の宿営地に足を向けた。ところが炊事場まで行って思いがけない光景にぶつかった。寝床で眠れぬ夜を過ごしているに違いないと思った彼が、なんと小川のほとりにしゃがみこみ、へちまで釜を磨いているのである。わたしは彼に、明日から兵器廠で働くようにと言った。そこへ行けば静かな環境で働けるし、自尊心を傷つけられるようなこともないから気が休まるだろうとすすめたのである。すると彼は、目に露を宿して、自分は処罰を受けても司令官のそばで受けたい、司令官のそばにいてこそ心が休まると答えるのだった。

「昼に、君が人知れず、泣いているのを見た。それで、そのことをわたしなりに解釈し、炊事隊にいるのが心苦しいようだから、兵器廠に移そうと考えたのだ」

こういって金周賢は微笑を浮かべ、わたしの手をとった。

「そうではありません。わたしは、わたしを処罰して胸を痛めている司令官同志に申し訳なく思い、それに自分の恩知らずな行為が心苦しくて、つい涙をこぼしたのです。司令部党会議でわたしの問題が持ち出されたとき、わたしが一番恐れたのはなんだと思いますか。それは、わたしを隊伍から除き、どこか遠くへ追いやるのではないかということでした。わたしは死んでもここで死にたかったのです。革命の隊伍を離れて、どこに生きがいがありましょうか。わたしを捨てずに炊事隊で働けるようにして下さっただけでも有り難いことです」

わたしは彼の話聞いて、夜遅くまで小川のほとりにしゃがんで釜を磨いている彼の真情が理解できた。彼は自分の身はどうなろうと、わたしのそばにさえいられば良いと思っていたのである。そばにさえいられば、自分が指揮官になっても炊事隊員になってもよく、批判され処罰を加えられても、ただ革命隊伍からはずされさえしなければ良いとするところに、金周賢の真面目があった。

こういう気質の人は、同志から加えられる批判や処罰を信頼と愛情として受けとめるものである。金周賢は、自分の誤った行為が革命にどれほど大きな損失を与えたかを深く考えたのである。

(自分は革命家になりきったつもりだったが、こうしてみるとまだまだだ。司令官同志の信任を得ていたから隊にいられたのであって、こんな未熟な革命家がどこにいるだろうか。同志たちの批判はみな合っている。これを機会に思想鍛錬に励んで、筋金入りの遊撃隊員になろう)

こう考えて彼はいっそう自己改造に励んだという。

金周賢は釜を背負っていた日々、学習にも打ち込んだ。彼が処罰を受けた年の11月、司令部書記処

がわたしの論文『朝鮮共産主義者の任務』を小冊子で出版するとそれを真っ先に手に入れて熟読したのは彼だった。体に障ることも考えず、学習に打ち込むさまをみて、炊事隊員たちは、自分たちが慕い尊敬していた以前の上官がもしや倒れはしないかと心配した。そして金周賢の背のうから小冊子をこっそり取り出し、テントの後ろの石の下に隠した。金周賢はそれを探そうと何日か苦労し、そのせいかげっそりと頬がこけてしまった。小冊子を失って食欲までなくしてしまう有様だった。あわてた炊事隊員たちは、隠しておいた小冊子をそっと背のうに戻した。そして、「周賢同志、もう一度よく探してみてもどうですか。背のうの中の物がどこへいくというのですか」と言った。金周賢は背のうを探して小冊子を見つけると「いや、不思議なこともあるものだ」と言って、子どものように喜んだ。

彼は思想鍛錬をりっぱにおこなった。さすがに労働者あがりの古参の革命家だけあった。彼が自己改造に努める様子は、感動なしには見られないほどだった。それでわたしはいまも、幹部たちが自らを革命化しようとするなら金周賢のようにすべきだと話している。

金周賢が給養担当官の任を解かれて6か月目に、わたしは彼を第七連隊長に任命した。もとの位置に復職させず連隊長に任命したのは、彼がつねに銃声の響く戦場に立つことを願っていたからである。連隊長になった金周賢は勇敢に戦った。長白県の佳在水および十二道溝の戦闘をはじめ、臨江県六道溝戦闘、双山子戦闘、呉家営戦闘、賈家営戦闘、新台子戦闘など、朝鮮人民革命軍主力部隊がおこなった1938年の春季攻勢とその後の大小の戦闘で、老練かつ大胆な軍事指揮官としての実力を遺憾なく発揮した。その年の夏は新台子から濛江、柳河、金川地方にまで進出して、敵の背後をたたき戦闘をりっぱに指揮した。彼に率いられた第七連隊は、人民のあいだでの政治宣伝もたいへん活発におこなった。村落に入れば、連隊長自身が率先して対人活動に熱心に取り組んだ。

金周賢は1938年10月、濛江県南牌子の密林で金沢環、金永国（キムヨングク）と一緒に後方病院の患者のために蜂蜜を取っていたところを「討伐隊」に奇襲され戦死した。彼は連隊長になってからも、隊員の面倒をみるために奔走した給養担当官のころのように、戦友たちの生活上の問題を片時も忘れなかったのである。

戦死後、戦友たちは彼の遺品となった背のうを開けてみた。中身はなにもなかった。誰にもあるべきはずの予備の履き物すらないのである。彼の伝令に尋ねると、前日、靴を履き古した隊員に与えたという。金周賢が残した背のうを抱きしめると、涙がどっとあふれ出た。彼が給養担当官を務めて以来、革命軍のために工作した糧秣や軍服地、履き物をすべて合わせれば、山をなすであろう。履き物だけでも数千足になる。けれども、彼は自分の予備にとっておいたたった1足の靴まで隊員に与えたのである。そのからっぽの背のうを見て、わたしは革命家の財産と人生観とはどんなものであるかを深く考えさせられた。幸せを願うのは人間の本性である。この世には拝金主義者が多い。そのような人の目から見れば、金周賢は財産のかけらもない無産者だったといえよう。しかし、わたしは金周賢こそまごうかたなき富豪だったと思う。なぜなら、彼は生の最後の瞬間まで、億万の黄金にも替えがたい高潔な思想と精神を身につけていたからである。